きます。習熟度別学習の所期の目的を達成させるためには，とくに，学業指導と進路指導を教育課程の中に有機的に位置づけることが，必要でしょう。

6　教育課程評価の重視

習熟度別学習を目指す教育課程の改善を図るためには，教育目標を重点化し，それを具体化して基準をつくり，評価します。この場合，到達目標を「観点」として設定し，その到達の度合いによって評価してゆくのが，目標との関連が鮮明になるので，すぐれた方法といえます。

そして，形成的に教育課程の実施途中で改善を図り，また，総括的に年度末に評価して，次年度の計画改善に生かしてゆきます。

教育課程においても，目標があれば評価があるのは当然です。評価活動を充実させて，習熟度別学習を目指す教育課程が，有効に機能するようにしたいものです。

7　習熟度別学習を可能にする教育課程の弾力的運営とは，どのようなことをいうのでしょうか。

生徒の学力の多様化に伴い，学習不適応の生徒が増え，その救済のためには思い切った，教育課程の弾力化が求められており，また，習熟度別学習指導を成功させるためには，教育課程の弾力的運営で，これをバックアップすることが必要なことは，前述のとおりです。

現在の教育課程で行われている弾力化は，主として，類型制（コース制）をとっています。すなわち，生徒の進路に合わせて，進学に便利なコース，就職に便利なコース，さらに，進学には，文科系，理科系のコースなどがとられています。しかし，コース制では，なお，科目選択の余地は限られ，習熟度の幅に応じた選択制とまではゆきません。また，コース間の移動も簡単にはできず固定的です。

新学習指導要領は，多様化する生徒の能力の実態に応じられるように，種々